

庄野潤三論 (三) —「プールサイド小景」から「旅人の喜び」まで—

A Study of SHONO Junzo (3) : from Poolside Shokei to Tabibito no Yorokobi

鷺 只 雄

Tadao SAGI

はじめに

庄野氏の文学に親しんで長い年月が経つ。氏の文学は私にとって気がかりであった。刊行されることにもとめた著作集や単行本収録、あるいは未収録の初出コピーや、書評や評論の類の参考文献もいつの間にか大部となり、書棚の一角を形成するに至った。

その間、「庄野潤三論」と題するものを二本¹書き、文庫本の解説²も書いた。その後、新出の十和田操宛庄野潤三書簡三十九通を入手したので三回に分けて翻刻と論考を発表³した。

以上が（辞典や研究史の類の執筆を除けば）私の庄野さんについての発言のほぼ全てである。庄野論としてはまだ緒に就いたばかりであるが、困ったことに完結するまでの私の残り時間が案じられる年になってきた。そこでこれまで本誌には吉井勇についての資料発

表の連載をしてきたが、丁度その「三峰日記」（宮内庁書陵部蔵）も前号で完結したのを期に、吉井勇論の方はひとまず中断して（既述したように、吉井友実については膨大な資料が残されていて、あとの位の歳月を要するか一寸見当がつかないという事情もある）、庄野論に切り換えることにしたことをおことわりしておきたい。

前掲の「庄野潤三論」(一)では「ザボンの花」（昭30・4・1）8・31「日本経済新聞」までを対象としていたので本稿はその前後の作品から論を始めることにしたい。

一 「プールサイド小景」

それまでに四、五回、文壇への登竜門とされていた芥川賞の候補作に推されながら受賞に至らなかったが、「プールサイド小景」（昭

29・12「群像」『プールサイド小景』昭30・2・25 みずす書房初
収 全集1収録)で三十年一月に第32回芥川賞を受賞した。この時
はダブル受賞で、小島信夫の「アメリカン・スクール」(昭29・9
「文学界」と一緒であった。

枚数は四〇〇字詰原稿用紙52枚と意外に短い内容は詰まってい
る。

氏はこれまで一貫して〈夫婦小説〉を書いてきたが、この作品は
そうした中で到りついた一つの頂点を示すものと言ってよいであろ
う。

この作品は典型的な小市民の平和な生活が些細な事件によって危
機にさらされ、崩壊してゆく過程を描く。傍目には「(あれが本当
に生活だな。生活らしい生活だな。夕食の前に、家族がプールで一
泳ぎして帰ってゆくなんて……)」と幸福を絵に描いたように見え
る、繊維会社の課長代理青木一家には実は一週間前に突然災厄が降
りかかってきていた。青木が鹹になった。理由は彼が会社の金を使
い込んだからであり、本来なら弁償すべきところ、それは許す代わ
りに即日退職となったからである。その結果明らかになった事―
「日常にひそむ深淵」が、主として夫人の視点を通して次々に白日
の下にさらされてゆく。

まず、会社の金は「(俸給の六ヵ月分くらい)だが)飲食等の
「遊び」に使ったと夫は言う。その点での非を夫は勿論認めている
のだが、しかしこの種の問題の場合、夫を一方的に悪人として断罪
してみても事柄の解決にはならない。夫人自らもおのれを省みてみ
ると、これまでは全く思いもしなかった「迂闊」さにいやでも気付
かざるをえないのだ。

夫はもともと「遊ぶことと飲むことなら、万障繰り合せる男」
で、「得意先の接待」と称して「毎晩帰宅が十二時近く」というの
も、一寸考えればすぐ気付くように毎晩社用のわけはなく、自腹で
飲むことも多いに違いない、とすれば小遣いが足りるはずがないの
に、それに疑問を持たなかった「迂闊」さは何としても免れ難い。
また、結婚後十五年になるのに夫の身に危険を感じたことがなく、
「勤めを大事にしてね」と頼んだ覚えもなく、十五年もウカウカと
過ごして来たのであった。

次に使いこみの誘因の一つには姉妹でやっていたバア通いがあ
り、犯罪の陰に女あり、あるいは憂さ晴らしの常套の例に洩れな
かったことである。

これに対して次にあげるのは、こうした具体的、現実的な要因で
はなく現代人の生、あるいは存在そのものにまわりついているも
ので、これあることによつて作品は俄然その奥行きを深くすること
になった。

まずメール・シュート―九階建ての会社のビルのエレベーターの
横に、素通しで外から中が見えるメール・シュートがあつて、投入
された手紙や白い封筒が音もなく落下してゆくのが見えることがあ
る。うちの社のビルの廊下は「特別薄暗い。あたりに人気のない時
に、不意に白いものが通るのを見かけると、僕はどきんとする。そ
の感じはどう云つたらいいだろう。何か魂みたいのもの―へんに淋し
い魂のようなものなんだ。」と夫は告白する。この夫は何故ひらひ
らと舞い落ちるメールに「淋しい魂」あるいは〈漂泊する魂〉のシ
ンボルを見出すのかと言えは、「油断も隙もない(中略)人間世界
が、どの部屋にも詰まっている」会社の中に毎日いて、そこにいる

間は絶えず緊張し、競争していて、孤立や孤独を余儀なくされ、一人ぼつちを強いられている。それ故、各人は孤独な「淋しい魂」をかかえ、風に吹かれればフワフワと、あるいはヒラヒラと舞いあがる鴻毛の軽きに過ぎないわけで、そのアナロジーから選ばれたものである。

次に早朝、まだ出勤時間前の会社の部屋の椅子―尻が丁度乗るレザ―の部分にそこに坐る「人間の五体から滲み出て、しみ込んだ油のようなもの」を発見して「それはきつとその人間の憤怒とか苛立ちとか、愚痴や泣き言や、または絶えざる怖れや不安が、彼の身体から長い間かかって絞り出した油のようなものだ。」と断じて、世にあるサラリーマンの怒りや愚痴や怖れや不安を代弁する。

次に戸を開けて室内に入る時の社員の表情について分析してみせる。

部長も課長も、大部分の者は怯えていない者はない。何が彼らを怯えさせるのか。それは「個々の人間でもなく、具体的な理由というものでもない。(中略)家庭に戻って妻子の間に身を置いた休息の時には、なお彼等を縛っているもの」であり、「夢の中までも入り込んで来て、眠っている人間を脅かすものなのだ」。

そして最後にある社員が夫に言った言葉。「うちのかあちゃんかゆんべも泣いておれのことを口説くんだ。どうかお願いだから短気起こさないで、月給は安くて今のままのぴいぴいでも我慢するから、決して早まったことしないで後生大事に勤めておくれよって。そう云って泣きやがるんだ。おれもつい考え込んでしまったよ」

大略、以上のような夫の話に夫人は仰天する。夫にこのような会社勤めの辛さがあることなど夢にも思わないことであり、その苦痛

故に真直ぐに帰宅できず、バアやキャバレーで女と一緒にいることで辛うじて苦痛を忘れていた、憂さ晴らしが必要だったなどは想像もできないことであつたから。

夫が「会社勤めの苦痛や不安」を一言も妻に話さず、妻もまたそうした事情に疎く、無関心で夫の内面の事情には風馬牛であつた場合の夫婦の間柄の典型的な例をこれは示しているであろう。

そこから引き出される問題は青木夫人が問うように、十五年も一緒にいて初めて知るなんて、「何という、うっかりしたことだろう。」「自分たち夫婦は、十五年も一緒に家に暮らしていて、その間になにを話し合っていたか?」、夫婦とは? 妻とは何なのか? 子供たちとの家庭とは何であるのか? 「女の影」と家庭崩壊への危惧等々さまざまの渦がひきこもると待ちかまえているわけで、まさしくそこは「日常生活直下の地獄」にほかならない。

換言すれば、夫の臆首によって現代におけるサラリーマン家庭をめぐる問題―憂さ晴らしの問題、夫婦の対話の不在、夫婦の絆の問題、現代における勤めの苦痛の問題、孤独・孤立の問題、現代社会・文明社会の歪み等々の問題がたちあがるしかけになっているといつてよいであろう。

そして重要なことは、作品が現代における夫婦のありようを問うというシリアスなものであるにもかかわらず、それが深刻悲壮ではなく、ユーモアをたたえて格調高く仕上げられていることである。

その成功した要因としては一つには「快活な奥さん」という青木夫人からの視点を多用したことがあげられるであろう。もう一つは映画のように印象的なワンシーン、ワンカットを重視して、ワンシーンの短いものは四行⁵から成るといふように、カットを積み重

ね、エピソードを集積して作品をこしらえていることがあげられるであろう。

芥川賞の選評は、丹羽文雄・石川達三を除けば、井上靖・佐藤春夫・川端康成・宇野浩二らに作品の「軽さ」「弱さ」を指摘する声はあるものの概ね好評であり、また「出来上がった作家と言え、庄野氏が一番でき上がっている。」(井上靖)、あるいは「註文原稿をこなして行ける腕のある人だ。」(舟橋聖二)という声にも押されて庄野氏は作家への道を歩み始め、昭和三十年一月に芥川賞を受賞してから約半年後の八月にはそれまで勤めていた朝日放送を退社して、作家一本の生活に入った。この頃の氏の筆力は旺盛で、ある調査によれば、昭和二十年、二十一年は氏が最も多くの作品を書いた時期で、ちなみに三十一年一月から九月までに、氏は十三篇の小説を書いて、日本で八番目に多作の作家になっているという。

もともと私の調査した所では右の数字よりは若干数は少ないが、依頼された原稿は殆どことわらずに執筆していたかと思われるほどの量であることは確かである。そのような経験は恐らく庄野氏にとって生涯に一度のものと思われるので、受賞後の昭和三十年と三十一年に書かれた作品についてざっと目を通しておきたい。

二 受賞後の作品

「伯林日記」(昭30・2「文芸」)『プールサイド小景』所収 全集1収録)は庄野の父貞一が昭和二年に8ヵ月間欧米教育視察旅行に出かけた際の日記をもとにした小説で、滞独中下宿した軍人遺族の娘の姿が印象的である。「バングローバーの旅」(昭30・4「文

芸」)『バングローバーの旅』 昭32・6・5 現代文芸社初収 全集2収録)は敗戦後に激増したアメリカ軍の駐留兵士と日本人女性の結婚問題―所謂戦争花嫁の問題を真面目に取扱った小説で詳しくは後で再説する。

「雲を消す男」(昭30・5「文学界」)『バングローバーの旅』初収 全集2収録)は、会社の同僚を抹殺したい願望を持つ男と、突然妻に蒸発されて途方に暮れている男―この二人に、雲を消す超能力を持った博士を配して、人間のもつ何ともやりきれない「悲哀」を描いている。この場合、作品の舞台は全てニュージーランドと目先が変えてある。

「兄弟」(昭30・5「新潮」)これは昭24・4「文芸雑誌」に発表の同題の作品を改稿増補したもの。『バングローバーの旅』に初収全集2収録)は氏の二人の兄の対照的な姿を挿話的に描きつつ、自身の同級生の女生徒へのせつない思いを点綴し、「帰宅の時」(昭30・6・28「別冊文芸春秋」46号 単行本・全集未収録)は中年の真面目男が男の快楽のために生まれてきたのではないかと思わせるような女のとりこになって全てを忘れてうちこむが、やがて求婚者が現れて手を引くに至る経緯を描いて、エンターテインメントにまで手を広げるサーヴィスぶりであるが、肝腎のヒロインの魅力が今一つ読者には伝わってこない憾みは否定できない。

「薄情な恋人」(昭30・7「知性」)『バングローバーの旅』初収 全集2収録)は前出の「兄弟」とも一部重複するが、氏の小学校から中学校時代にかけての恋の歴史を辿ったイタ・セクスアリスであり、「海の景色」(昭30・7「中央公論」) 単行本・全集未収録)は「紫陽花」(昭27・4「文芸」)『プールサイド小景』初収 全

集1収録)の後日譚であり、「紫陽花」はヒロインの草間章子が複雑な家庭に育ち、母が生花の師匠で、父は日本画家だが放蕩三昧、やがて父にひきとられて双生児の赤ん坊がいる女の家で暮らすが、これがバクチはうつ、ケンカはする、平気で章子をなぐる性もない莫連女で……という断片的な聞き書きをそのまま投げ出したとりのめないものであったが、「海の景色」もまた前作同様とりとめのない点は同じで、半年前に結婚した生活を開放的に語っている。「三つの葉」(昭30・7「小説新潮」『旅人の喜び』初収 全集1収録)は美人だが、妻らしい心遣いが無く、家庭的でないため夫婦仲がよくない父母に、ある時夫の愛人問題が発覚して妻は実家に帰るが、夫の迎えて無事元のサヤにおさまる次第を加奈子の小四の時の回想として描く。

「少年」(昭30・10「小説新潮」 単行本・全集未収録)は小学四年の時、それまではトンボ気狂いであったのがガラリと変わって野球に転換。それでクラスでチームをつくり、氏のチームは弱いので二部となり、近所の高商生に頼んでコーチをしてもらうが、試合をすると負けてばかりの話をユーモラスに語る。

「緩徐調」(昭30・10「文芸春秋」『バングローバーの旅』初収 全集2収録)は結婚後六、七年倦怠期で夫に不満をもつ妻の渴きをあらわに描き(後の庄野作品からは想像もできない、夫婦の閨房での秘事の写真の話や、緑の野原でのセックス幻想などがばらまかれていて)、「ビニール水泳服実験」(昭30・10「文芸」『バングローバーの旅』初収 全集2収録)は二人の高校教師の冬のプールを利用すべくビニール製の水泳服製造をめぐるドタバタコメディであり、「無抵抗」(昭30・12・28「別冊文芸春秋」49号 『バング

ローバーの旅』初収 全集2収録)は大坂外語時代に津田塾で第七回日米学生会議があり、その日本側メンバーの一員として出席した氏が、かねて思いを寄せていたイヴリンとのデートに「元気のよい」ジーンに割りこまれて「機会は」いや「青春は永久に去」ってしまったことを嘆く失恋小説である。「鷺ペン」(昭30・2・28「別冊文芸春秋」44号 『結婚』昭30・4 河出新書所収 全集未収録)は女房を養うのにも苦勞するしかない会社と思いつつも、イザとなるとふんぎりのつけられない男の悲哀を描き、これに連載の「ザボンの花」(昭30・4・1〜8・31「日本経済新聞」と、もう一つ「異端糾問」(昭30・1「近代文学」 単行本・全集未収録)という掌編小説―牧師の娘を妻にした田口がそれ故の受難、例えば日曜にはうつらうつら眠っていたのに教会への礼拝を強要されたり、酒を飲んで帰宅すると家に入れてもらえなかったりという話が加わって昭和三十年一年間に発表された小説は合計16篇になる。これは勿論私の調査の範囲内のことなので更に増える可能性はあることをおことわりしておきたい。

この他に座談会・エッセイ・その他の雑文を三十年に限って年月順に記せば、次のようになる。

昭30・1・23	根源的なもの	「朝日新聞」
2	幸福は今日も明日もある	「新女苑」
2・11	月給と原稿料―ムジュンとミレンと―	「日本経済新聞」
3	感想	「文芸春秋」
4	〈座談会〉新世代の新しい幸福―芥川賞の四	

- 新進作家の語る―安岡・小島・吉行・庄野
 9 かの旅―伊東静雄先生のこと― 「文学界」
 9・18 宿題 「朝日新聞」
 10・13 憂しと見し世ぞ 「日本経済新聞」
 11 青春期の読書 チャールズ・ラム「エリア
 随筆」 「文学界」
 12 〔書評〕 井上靖著「黒い蝶」 「群像」
 12 小沼丹 「文芸」

以上が私の調査で明らかになったものであり、いずれも短いものではあるが、しかし結構な数ではある。

次に前述のように、昭和三十一年に発表した小説についてざっと目を通しておきたい。

「可愛い人」(昭31・1「婦人朝日」 単行本・全集未収録)は次兄が住んでいた北関東の町から京都・奈良見物に連れてきた女友達との思い出(彼女は兄の事が好きだったと結婚後に手紙をよこし、暗い毎日を夫の家族と過ごしていると書いてあるのを庄野氏は読んでしまう。しかし、その後赤ん坊が生まれてから会ったが不幸には見えなかった)を、「勝負」(昭31・3「文芸」 「バングローバーの旅」初収・全集2収録)は中四の時上級生から喧嘩を売られて、あつという間に目に一発受けてかみこみ、屈辱の思いをしたことを綴り、「机」(昭31・4「群像」 「バングローバーの旅」初収・全集2収録)はサラリーマンのかかえるどうにもならない悲哀を、「離れ島」(昭31・4「小説公園」 単行本・全集未収録)は戦時中、九州大学の学生時代に同じ専攻の学生四人と一泊で博多湾内

の小島に出かけ、旅館もなく必死の思いで婆さん一人の家に泊めてもらった貧乏旅行の話。「ダゴンさんの恋人」(昭31・5「オール読物」 単行本・全集未収録)は女を使って契約を取ろうとした商社員の失敗談であり、「孔雀の卵」(昭31・5「小説新潮」 単行本・全集未収録)は結婚後四年、子無し同士だった豊子の家に赤ん坊が生まれることになり、取越苦勞家の秋子があれこれヤキモキする様子を挿揄的に描き、「ナイター」(昭31・6・28「別冊文芸春秋」52号 単行本・全集未収録)は無趣味な中年男の会社帰りのナイター見物であり、「黄色いガウン」(昭31・8「若い女性」 単行本・全集未収録)は小学四年生の時の夏の暑い思い出―父の学校の夏の林間学校Nコロニーの傍にあった別荘に一人で住んでいた大学生の長兄の所に泊まりに行き、コロニーと一緒に遊んだ女学生たちから強いられた自分は「特別加入者」であるという「身分」の違いの認識―遊んでもらっている「お客さん」であり「アブラムシ」であることを忘れて調子に乗ってはいけないということをしたたかに痛感させられた所以を語り、「夢見る男」(昭31・9「小説新潮」 単行本・全集未収録)はモチない三十男、砂押次郎のあれこれと夢想するわびしい土曜日を、「会話の練習」(昭31・10「小説公園」 単行本・全集未収録)は中四の時(昭和12年)数ヶ月間イギリス人のミセス立上(28才)に英会話を週一回習った時の回想を記し、「不安な恋人」(昭31・10「文学界」 単行本・全集未収録)はインタン中の医学生に起こった不条理な在日米軍病院での研修をめぐってのドタバタ劇を、「ハンモック」(昭31・11「オール読物」 単行本・全集未収録)はおでん家の看板娘清ちゃんをめぐる二人の青年の珍騒動を描き、「太い糸」(昭31・12「別冊文芸春秋」55号

単行本未収・全集3収録)は中三の夏に神戸―横浜間の船旅に親の許可が出て小躍りするのも束の間、直前に盲腸・入院・手術となってフイとなり、がっかりするが、新たに病院で性への好奇心が発動する次第を記す。他に、児童文学の「スカランジエ口さん」(昭31・5「小学六年生」未見 単行本・全集未収録)と連載小説の「旅人の喜び」(昭31・5―32・2「知性」『旅人の喜び』初収・全集2収録。これについては後に再説する)があり、以上昭和三十一年に発表した小説(童話も含む)はトータルすると15篇になる。前年は16篇であるからこれは大変な数字であり、この他にエッセイや座談会、雑文があるわけで、それを調査がこれまでにすんだものと三十一年のものを列記すると次のようになる。

昭31・5	ヘミングウェイ	「近代文学」
11	梅崎春生論	「文芸」
11	〈四〇〇字時評〉映画	「新女苑」
11	「舞踏」の時	「群像」
11・11	マッケンジーさん	「ABC」
12	家族旅行の楽しさ	「旅」

エッセイの類は6篇で、三十一年の執筆総数は21篇ということになり、前年のトータル26篇に続くわけで、健康をむしばむ引金となりうるものである。(ここでの問題の最大なものは何かと言えば、これら大量に執筆された作品の多くはのちに単行本に収録されて後世に残るといえるものではなくて、見られて明らかなように、それはエンターテインメントとしてその時々消費されるものであつ

て、単行本や全集には収録されない種類のものであることだ)幸いにして頑健な氏の肉体は病魔の侵入を許さなかったが、しかし異変は決してなかったわけではない。

翌昭和三十一年に発表した作品の激減である。この年1月から8月までに発表した小説は5篇(このあと12月まで延長してもあと2篇増えるだけ)と、30年、31年に比べると半分以下になっている。8月までで区切ったのは理由があるからで、この年8月26日から翌年8月まで一年間野氏は夫人同伴でアメリカ、オハイオ州ガンビアに留学したからである。創作力の衰退に異変を見ることができよう。

もう一つは三十二年二月頃から体調に変化が現れたことで、この頃から夏までカミソリ負けによるアレルギー症状がひどく、長期間にわたって苦しめられることになった。

こうした異変はジャーナリズムからの要請による執筆過多の過労によつてひき起されたものによるものではないと言いつけることは困難であろう。

三 「バングローバーの旅」

次に受賞後の昭和三十年から、アメリカ留学をはさんで三十四年までの五年間の動静と作品についてふれておきたい。

三十年、三十一年については既に述べたので繰り返さない。但し、注目すべき作品として「バングローバーの旅」をあげておきながらまだ論じていないので、ここで取り上げることにする。三十一年から翌年に連載された「旅人の喜び」も同断であり、三十四年の

「ガンビア滞在記」も詳しくふれることにし、他は紙数の制約もあるので案配して述べることにしたい。

「バングローバーの旅」(昭30・4「文芸」)『バングローバーの旅』昭32・6・5 現代文芸社初収・全集2収録)は四〇〇字詰原稿用紙に換算して約86枚、一挙掲載の作品である。

この小説は素材的には所謂「戦争花嫁」物の一つであると言つてよいであろう。しかもそれらの殆どが悲劇—作品の中に繰り返すという例が出て来て明らかのように、貧困・差別に苦しみ、発狂や家出をしたり、若さと情熱に任せて地に足がついていなかった故の失敗であるのに対して、この作品ではアメリカから日本移住を計画して来日したバングローバー一家が、挫折して再び帰米して再出発を図るといふのは、日本での生活に挫折したという点では、現象的には悲劇、或いは失敗に見えるかもしれないが、本質的には、あるいはバングローバーの生き方そのものからすれば本来の正道に帰つたということなのであつて、一寸まわり道をしたことにはなるが、決して悲劇でも何でもない。

では何故そういうまわり道は起つたのか。そのためには作品の構図を先ず明らかにしておかねばならない。

ヒロインミミコの夫バングローバーとはどういう人物か、何を志し、生の原理は何かといえ、「子供の時分から大きな動物が好き」でその希望を生かして大学は「コロラドの獣医学校」に進学して獣医となった。

獣医には二通りあつて、牛や馬などを扱う獣医と、犬や猫などを扱うペット医があり、大都市にはペット医が住み、獣医は田舎町に住んでいる。

犬や猫を扱う医者は住いも器具もきれいで、仕事は手を汚さないで楽である。牛や馬を扱う医者は、百姓相手の仕事だから、どんな糞だらけのぼろ小屋の中でもやるし、時には野良でもやるし、仕事は汚くてつらい。

そして、収入はどうかと云うと、きれいで楽な犬猫相手の医者の方がはるかにみいりがいいのである。

それなのに、バングローバーは牛や馬を扱う獣医の方を志望したのだ。それは、彼が犬や猫の病気を治すより、牛や馬が苦しんでいるのを助けることの方がよかつたからだ。仕事が汚くて、つらくて、みいりがよくななくても、バングローバーはその方が好きだったのである。(4)

ここにはおのれの天職に誠実で、地の塩たらんとして何の不安も動揺も無く、人間としては堅実で大地に根をおろして、軽薄な都会の華美と消費の浮草生活を排して、自然と動物との共生をめざしている人間がいる。

もう少し具体的に言えば、十九万坪(四十七エーカー)の土地に親子四人と母牛二頭、十ヶ月の牝牛八頭、赤ん坊の牛が六頭もいるのである。

ここに見られる自然との共生、生命の自由な状態、自然の中での自由な生活、換言すれば原始への回帰願望は作者である庄野氏自身のものでもあるのである。その事は作品に明らかで、繰り返す作品の中で語られるが、この前後の作品でその例をあげれば「ザボンの花」の12章「アフリカ」で矢牧が原始への憧憬を語り、土人の生活

がしたい、また、太陽の下を喜び、木陰の昼寝を楽しみ、夕立をシャワーと歓喜する生活の方が幸福ではないかと主張したり、「プールサイド小景」の末尾近くで青木夫人は文明生活を憎悪し、「太古の時代」の生活を連想してその方が「ずっといいに決まっている。」と次のように断じている。

男は退屈すると、棍棒を手にして外へ出て行き、野獣を見つけると走って行って躍りかかり、格闘してこれを倒す。そいつを背中に引っ担いで帰ってきて、火の上に吊るす。女子供はその火の廻りに寄って来て、それが焼けるのを待つ。もしそういう風な生活が出来るのであったら、その方がずっといいに決まっている。

このように明確な生の原理をもち、着々とおのれの生活を目標に向って実現していたバングローバーが、生の軌道を変更したのは何故なのか。獣医としての人生設計を破壊し、広大な土地を手離して狭い日本に来て、職を探すとは気狂い沙汰ではないかと思われるのであるが、何が彼をそうさせたのか。

それは一言で言えば妻ミミコのホームシックのせいということになるであろう。

母一人子一人の裕福な家庭に我が儘いっぱいに育ち、派手で、お転婆で大胆に行動するミミコが子育てに手が少しづつかからなくなり、余裕ができるにつれ、本性である大胆さと行動力がムクムクと頭をもたげてくる。

折柄、一つには一度も日本へ帰っていないホームシックの問題があ

る。京都に一人残してある老母への心配がある。佳子と文通を重ねるうちにさまざまな食物―ザルソバ・ナスの漬物・スシなど―や天神祭に郷愁をかきたてられ、望郷の思いがつのつてゆき、とうとう夫は見かねて日本への里帰りを許す。その事でミミコの帰心に火がつき、制御不能となる。渡航費と生活費のために夫に軍隊への再入隊を考えたり、日本へ里帰りではなく、永住を考え、そのためには夫の転職を考えするというふうにとめどなく進み、夫もまたそれに巻き込まれ自分を見失って同調し、夫婦一体となって破滅への道を進むことになる。

しかしミミコはそのような帰国が破滅への道だとは気がつかない。ホームシックに火がついてからは帰心矢の如しで、そのことだけが目的になり、他の事は見えなくなってしまう。それまで日本の佳子にあてて、自分がどんなに幸せな戦争花嫁であり、経済的に恵まれていてという程ではないが、ともかく安定しており、夫は自らの職業を天職と考えて愛し、着々と将来の人生設計を進めていることを無上の幸福とし、また誇りにしてきたにもかかわらず、その事が見えなくなってしまう。

ミミコのホームシックによる帰心がいかに我儘であり、自己中心的であり、夫をアメリカから切り離すことはその人生を破壊することであり、幸福を崩壊させえることであるのに気がついていない。ここにミミコの軽薄さ、考えの浅薄さが出ている。

訪日して初めて遅まきながら夫婦は根無し草になっている自分達に気づき、あっさり帰国を決断してアメリカで再スタートすることにきめたのだが、その決断の早さはあたかも憑き物が落ちたようでもあり、二人の賢明さでもあったと言えよう。

「バングローバーの旅」という小説は、古来人生を旅と見る伝統的な見方に従ったものであり、その観点からすれば、バングローバーの最初の日本への旅はミミコとの出会いによる伴侶とめぐりあう旅であり、アメリカでの新生活は彼の理想とする生活の実現をめざしての旅であり、ミミコもホームシックにふりまわされての軌道修正の再来日は、気候は悪く、土地は狭く、物価は高く、人口は密集して彼の住めるところではないことを認識させる旅であり、アメリカで再スタートする旅になったことである。

重要なことは、作品では彼の失敗を批判的に冷たく扱っているのではなく、愛妻のホームシックを解消してやろうとする余りに、過度に肩入れし過ぎた結果のアクシデントであり、一つの貴重な経験として、今後の旅に役立つものとして描いていることである。つまり、当時の時代背景を考慮に入れる必要があるわけで、日本とアメリカ間の渡航（無論船である）には莫大な費用がかかり、通信は不便であり、情報は少ないという事情が厳然として存在していたというのを忘れてはならない。

人生を旅とし、我々をこの世に滞在するものとする庄野氏の認識はこの頃から明確になっていたと見られるが、その事をはつきりと告げるのが次の一文である。アメリカのオハイオ州ガンビアに一年間夫婦で留学した経験を描いた「ガンビア滞在記」（昭34・3・5 中央公論社）の「あとがき」に

私は滞在記という名前をつけたが、考えてみると私たちはみなこの世の中に滞在しているわけである。自分の書くものも願わくばいつも滞在記のようなものでありたい。

作者のあこがれの一面をバングローバーはもっており、いろいろ言いたい事はあるのだが最後に一つだけつけ加えてこの作品についての論及は終わりにしたい。

この作品の主人公バングローバーには庄野氏の原始への回帰願望が託されていることを指摘したが、同様にヒロインミミコの日本人への郷愁やアメリカへの違和感には、大阪から東京へ移住した庄野家の、特に庄野夫人のそれが重ね合わせられていることを指摘しておきたい。

四 「旅人の喜び」

「旅人の喜び」（昭31・5・32・2「知性」『旅人の喜び』昭38・2・25 河出書房新社初収・全集2収録）は長篇で、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して約二百三十枚弱の作品で、五歳になる一児の母である矢追貞子（二十代後半）をヒロインとして結婚・育児・生活に直面する若い女性の内面を誠実に追及した作品と言つてよいであろう。

家事と育児の繰り返しの毎日の中で、貞子は時に人生への幻滅・荒涼・孤独の思いから投げ出してしまいたい気持ちにおそわれることもしばしばだが、しかし、それは「我儘だ。（中略）我慢しなければいけないことだ」と考えて必死にやってきた。

貞子と一緒に学校を出たクラスメイトとくらべて割合に恵まれた結婚をしている方だと思いいながらも、結婚生活というもの

は苦しむことが多くて慰みが少ないものだと感じることがあった。

そんな時にはつくづく現在のわが身をつまらなく思ったが、それでも妻の仕事というものは投げ出せるものではない。夫だって自分と同じことで慰みや喜びの乏しい生活を我慢してやっているとすると、彼女は「これはあたしの我儘だ。こんなことは、やはり辛くても我慢しなければいけないことだ」と考えて、元氣を出して来たのだ。

「七」

つまり、貞子は結婚や人生はこれでいいのかしら、と幻滅と疑惑を感じつつ、他方、それでは妻の仕事を投げ出しても自らの歩む道を見つけようとめざめるボヴァリスムの道は「我慢だ」として排する。何故なら、もう一方の当事者である「夫だって自分と同じことで慰みや喜びの乏しい生活を我慢してやっている」のを知っているからだ。こうして貞子は一旦は人生に幻滅し、無為と荒涼の中にさらされ、孤独に苦しんでもなお「我慢」する道を選ぶのである。

とすれば、「旅人の喜び」は昭和二十年代の庄野氏のメイン・テーマである〈夫婦小説〉直系の作品である。

私見によれば、昭和二十年代の庄野氏の第一主題は結婚であり、男女の愛を執拗に追求する〈愛の作家〉、とりわけ夫と妻を対象とする〈夫婦小説〉の作家であった。そのことは「愛撫」から「舞踏」「スラブの子守唄」「メリイ・ゴオ・ラウンド」に至る作品に明らかであり、そこで夫は卑小な存在であるが、ヒロインの妻は光をあてられ、詩人的な言動をふりまいて魅力的である。

ところで、これら〈夫婦小説〉のテーマについて考えてみると、

(このことについては既に拙稿「庄野潤三論(一)」で論じたので詳しくはそちらを参照願いたい。) いずれも結婚後三年から五年経った夫婦を素材として、結婚や家庭の幻滅・荒涼・無為・孤独を描いているところに共通した特徴がある。

これを要するに世間に行き通る言葉で言えば、〈倦怠期の夫婦小説〉として一括される、いものにはかならない。しかし、氏は〈倦怠期〉というような、手軽で安易な既成の通念によりかかって仕事を始めることを排し、結婚とそれによってつくられる家庭の本質・本来的性格を原理的に究め、根源に遡って追求するところから自らの仕事を開始したのであり、まさしくその点に氏の仕事の意義と新しさがあつたと言えよう。次に引用する作者の言は「結婚」からのものであるが、これを証するものであろう。

私は処女作以来、夫婦の愛を主題にした作品を多く書いて来たが、これは私が自分にとつてつねに本質的な、従つて切実なことだけしか書きたくない作家であつたからだ。つまり、私は結婚という一番ありふれていて一番むつかしいことの中に、生存の根源につながる大切な問題がしばしば暗示されているのを見るからである。私はそれらについてよく考えてみるために小説を書いた。「あとがき」昭30・6・15 第6刷 河出書房

図式化して要約すれば「愛撫」においては結婚と人生に幻滅し、その無為と空虚に漸くめざめた妻の覚醒をユーモラスなトーンの中に描いて見せた。次いで「舞踏」においては、夫に恋人ができたことによつて家庭に危機が生じ、初出時の雑誌では苦悩の果てに妻は

自殺して家庭は崩壊する。が、この結末は当時寄せられた批評の中に、妻を死なせなくともよいのではないかという疑問があり、その指摘には作者も納得するところがあつて、初版以後、妻の投身自殺はカットされたという経緯があり、それは〈生の文学〉である氏にとつては当然の措置であつたらう。

続く、「スラブの子守唄」は、前作同様、夫に恋人ができた点は同様であるが、「舞踏」より妻は一步進んで、夫が魂を奪われる程の人に出会つた喜びを二人で分かち合いたいと本気で思つた妻は実際にその事を口にして夫に恋人の件を打ち明かせ、妻公認のもとに夫が恋愛したらどうなるか、という試みである。つまり、この場合夫の恋愛は、家庭に胚胎する〈宿命的不幸〉を紛らす手段であり、気晴らしなのであつて、その点で彼等の〈恋愛〉は安全無害な〈擬似恋愛〉であり、〈恋愛ごっこ〉であることだ。

ところで、「愛撫」「舞踏」の模索、「スラブの子守唄」の手段、というふうに分り切つてみるとはつきりするのだが、これまでの作品は結婚・人生・生活に幻滅し、その無為と荒涼に目ざめ、その中でどう折れ合つて生きて行くかというように、現実に密着して、それを如何に認識し、如何なる手段、方法で生きて行くか―換言すれば現実肯定的なHow to live 型のものではあつて、その根源に遡つてなぜ・ドウシテと問うWhy 型の作品はなかつた。しかし、もし真に人生と家庭の意味を問うならば、イカニシテだけではなく、なぜと問うWhy 型の作品がなければ明らかに片手落ちであり、その本質究明は不十分であるとの謗りを免れないであらう。

「メリイ・ゴオ・ラウンド」はそういう志向から書かれた作品

で、ヒロインのなつめは結婚して五年、四歳の子をもつ母であるが、彼女は人生に慣れられず、また、慣れることを拒んでいる。彼女は「生活と云うものは、感激的なものではない」、「辛抱すると云うことが、生きることだ」、「朝が来たと思つたら、もうすぐ夜になつてしまふ」無為を、アンニユイの現実に対して〈ヘノン〉と言ひ、平凡で単調で日常茶飯の繰返しである現実を拒否し続けるのである。

その点で「メリイ・ゴオ・ラウンド」の妻は「愛撫」以後の作品の妻たちとは対蹠的である。

「メリイ・ゴオ・ラウンド」の妻、なつめが病んでいるのは明らかに Bovarysme であり、近代人の不幸にほかならないが、俗知はこれに関わらず、通り過ぎることをよしとする。人はそれに関わつては生きてゆけないからである。

つまりこの問題は生にとつて最も根源的であり、本質的であると同時に、現実の生活においては逆に最も迂遠なものであることもまた確かなので、これに関わつて苦闘した近代の文学者が存することは贅言するまでもない。

そういう一群の文学者についての私見の見取図を日本の近代文学に即して図式的に示せば、森鷗外はそれを歴史・史伝の世界に追尋し、華麗多彩な仮構の世界に追求したのが芥川であり、中島敦は中国の古代を主とする歴史の世界へ飛翔したと考えられ、このようなパースペクティヴの中に、九州大学東洋史学科出身の庄野氏を置いてみると、氏はこれらの作家達と極めて近い精神的種族に属し、大胆に割り切つて言つてしまえば、鷗外が歴史・史伝の世界で追及したところを現代の生活で試みているのが庄野氏の世界なので

はないか、というのが私のひそかな目論見・見当であり、同時に氏への私の関心も大根はその点にある。

論旨を元へもどすと、このような問題に性急な解決はありえないし、実際「メリイ・ゴオ・ラウンド」においても疑問・不満・抵抗が提示され、陳列されるのみで、問題が更に深められてはいない。では「メリイ・ゴオ・ラウンド」と「旅人の喜び」の相違はあるのか、ないのか、あるとすればそれは如何なる点にあるのか、について考えてみると、両者には明らかに相違がある。

なつめが現実に対して「ノン」と言い、それが頂点に達した時には自らの命を絶った（未遂に終わったが）ことが示すように全否定的なものに対して、貞子は妥協的であり、自省的であって、「妻の仕事」というものは投げ出せるものではない。」として踏みとどまり、そう考える最大の理由はパートナーとしての夫の存在であって「夫だつて自分と同じことで慰みや喜びの乏しい生活を我慢してやっている」ことを考えると「これはあたしの我儘だ。こんなことは、やはり辛くても我慢しなければいけないことだ」として感情に流されずにセルフ・コントロールができていることである。その点で貞子はなつめの成長した後身を示している。

最後にもう一つ指摘しておきたい。阪田寛夫は『庄野潤三ノート』（前出）の中で、著者とこの作品について面談した際に庄野氏の当初の予定では「若い女の精神と肉体の相克」を書こうと「野心に燃えてとりかかった」が、「そんなもの書けるわけがないんで」、連載小説のため毎月「難渋」したことを記している。

これに対して林富士馬⁸は、作者の「難渋した記憶しかない」という言葉が実に意外で、「読者の私にとっては、そういう苦渋の代

わりに、新しく出発した作家だけが持つ、一種のはずみと、みずみずしさが感じられて、たのしかった。初花と幻想と優しさだけが、何ともなつかしく、美しい」と言い、更に「平凡に見える私達の日常生活の深淵を見つめる作者の眼球は、優しいけれども、こわいところがある。まるで、奇怪なメルヘンの世界に曳きずり込むような強さがある」と評しているが、率直に言つて問題が深められずに、ただ投げ出され、放置されたままである現状からすれば、失敗作と云うほかないであろう。

注

- 1 拙稿「庄野潤三論(一)―出発前後―」(80・9・25「言語と文芸」90号 大塚国語国文学会) 同「同上(二)―「ザポンの花」を中心に―」(84・6・28「言語と文芸」95号 同上)。
- 2 拙稿「作家案内―庄野潤三―」(庄野潤三『絵合せ』89・6・10 講談社文芸文庫 所収)
- 3 拙稿「庄野潤三と十和田操(一)―未発表の庄野書簡をめぐつて―」(02・3・15「国文学論考」38号 都留文科大学国語国文学会) 同「同上(二)」(03・3・20「都留文科大学研究紀要58集」) 同「同上(三)」(03・11・20「同上59集」)。
- 4 三島由紀夫「日常生活直下の地獄」(昭35・7・6「読売新聞夕刊」)
- 5 ここでは統一するために講談社版全集の表記に従った。
- 6 阪田寛夫『庄野潤三ノート』(昭50・5・5 冬樹社) 68頁

参照。

- 7 注6の本の「第六章」参照。
- 8 林富士馬「怪奇なメルヘンの世界」庄野潤三著「旅人の喜び」
(昭38・3・17「週刊読書人」)